



変身願望

西村京太郎

へんしんがんぼう
変身願望

にしむらきやうたろう
西村京太郎

© Kyotaro Nishimura 1985

1985年3月15日第1刷発行

1989年3月23日第13刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183517-3



講談社文庫

変身願望

西村京太郎

目次

変身願望

七

回春連盟

六三

隣人愛

一〇五

オートレック号の秘密

一二七

アカベ・伝説の島

一六三

アンドロメダから来た男

二〇五

チャリテイゲーム

二二七

殺しへの招待

二六一

アリバイ

二八三

解説

郷原 宏

二八六

変身願望

十月下旬にしては、寒い朝だった。昨日までは、春を思わせる暖い日が続いていたのに、急に、冷たい大陸の高気圧が張り出してきて、北海道北部では、昨夜遅くから今朝にかけて、初雪が降った。

東京も、五度を割った。肌寒いというより、寒い朝を迎えた。吐く息が白くなる。

上野消防署の救急隊員で、この日、当直に当たっていた山崎は、不安を感じながら、寒暖計を眺めていた。上野駅から上野公園にかけても、この消防署の管轄である。地下道と、公園内には、今でも、浮浪者が何人もいる。よほど、あの辺りが居心地がいいのか、追い払っても、追い払っても、彼等は集って来てしまうのだ。

二日前に、地下道に三人、上野公園内には五人の浮浪者がいた。現代では、餓死することはないが、怖いのは、病死と凍死だった。

浮浪者は、酒好きが多い。それも無茶飲みするから、肝臓をやられている者が多く、病気に対して抵抗力がなかった。それに、こんな風に、急に寒くなると、凍死者が出るが多かった。

案の定、午前八時に、出勤要請があった。場所は、上野公園のS会館前である。二日前に、浮浪者が二人いた場所だった。

山崎たちの乗った救急車が、S会館前に到着した時、地面に倒れている中年の男のまわりには、数人の男女の小さな人垣が出来ていた。サラリーマンもいれば、野球のユニフォームを着た若者もいた。彼等は、公園内のグラウンドで、朝の野球試合をやるために来た連中だろう。

倒れている男は、典型的な浮浪者の恰好をしていた。

不精ひげの生えた顔、穴のあいたセーター、袖のすり切れた上衣、ズボンも見事なほど膝が抜けている。うす汚れた靴下。だが、茶色の靴だけは真新しい。浮浪者には、よくあるやつだ。靴は、多分、盗んだのだろう。

山崎は、屈み込んで、男の手首に触れてみた。脈はない。次に胸に耳を当ててみたが、すでに、鼓動を止めてしまっていた。

凍死は、心臓麻痺が多い。山崎たちは、男の身体を毛布で包むと、すぐ、救急病院へ運んだ。

山崎が危惧したとおり、すでに手おくれだった。病院が手当てをしたが、男の心臓は、二度と脈打たなかった。

男が、アルコールを飲んでいたこともわかった。泥酔者に凍死が多いのは、アルコールの作用で、皮膚血管が拡張し、体温の喪失が大きい上に、酔いで寒さを感じにくいため、急に寒くなったとき、身を守ることをしないからである。

ありふれた事件だった。

泥酔した浮浪者が凍死した。よくある事件である。もし、この男の死に、いくらかでもニュース・バリューがあるとすれば、今年になって、東京での最初の凍死者ということだけだろう。

2

新聞には、その通りの記事がのった。今年になって、東京での最初の凍死者。ある新聞では、文学青年の記者が、次のような言葉を、それに続けた。悲しい冬の前触れと。

新聞は、そんなセンチメンタルな記事を書いていたが、所轄の上野署では、この浮浪者の身元調査という、地味で根気のいる仕事と取り組まなければならなかった。

浮浪者の身元を割り出すのは難しい。彼等は、仲間にも自分の過去を語ろうとしないし、それまでの生活を捨てて、浮浪者になっていることが多いからである。

今度死亡した男も同じだった。どこを探しても、身元を確認できるものは、身につけていなかった。腕時計も、財布も、万年筆も、手帳も持っていない。もちろん、薄汚れた上衣に、ネームなど入っていないかった。

上野公園にいた他の浮浪者たちは、彼のことを知らなかった。この地区の浮浪者たちのボス格である通称ツネさんは、初めて見る顔だといった。とすると、浅草あたりからか、或は、もっと遠いところから、上野に流れて来て、不幸にも、凍死したと考えるべきだろう。

身長百六十八センチ。

体重六十八キロ。

推定年齢 四十七、八歳。

右眼下に直径約三ミリのホクロ。

これでは、特徴とはいえなかった。むしろ、ホクロを除けば、中年で、中肉中背といったところで、平凡な人物というところだった。

上野署が、男の特徴と考えたのは、別の三点だった。

男の身体全体に肉付きがよく、色白だったこと。

上衣、ズボン、セーターなどは汚れていたが、一番下の下着は、清潔で、新品だったこと。

靴はイタリア製の高級品で、男の足にぴったり合っていたこと。

だが、この三点といえども、身元を割り出す助けになるかどうかはなかった。

浮浪者といえども、最近では肉付きがいいし、毎日、身体を拭き清めている者もいる。色白な浮浪者だっていないことはない。

下着は、どこかのスーパード、盗んだものかも知れない。

靴も同じである。足にぴったり合っているからといって、本人のものとは断定できないのだ。

結局、二日たっても、凍死した浮浪者の身元はわからなかった。上野署の警官も、身元の割り出しに、さほど熱を入れなかったこともある。身元不明の死者は、今度に限ったことではなかったし、上野署の管内で、身元不明のまま、無縁仏として葬られた浮浪者は、過去に、何人もいたからである。

調書には、「身元不明」の判が押され、男の遺体は、茶毘^{だび}に付されることに決った。

高価な毛皮のコートを羽おった中年の女性が、緊張した顔で、上野署を訪ねて来たのは、遺体が、焼き場に運ばれる寸前だった。

「新聞に出ていた、亡くなった浮浪者のことで、伺^{うか}いたいことがありますの」

と、その女は、堅い表情でいった。

受付にいた警官は、

「どんなことでしょうか？」

と、いいながら、素早く、眼の前の女を観察した。高価な感じは、毛皮だけではなかった。身につけているものは、ハンドバッグでも、ドレスでも、靴でも、デザインが洗練されていて、高価に見えた。指には、一カラットは楽にありそうなダイヤが光っている。

どう見ても、あの浮浪者の関係者には見えなかったが、彼女は、身を乗り出すようにして、
「遺体を見せて頂きたいんです」

「ご存知の方なんですか？」

「ひよっとすると、私の主人かも知れないんです」

「ご主人？」

受付の警官は、びっくりして、女の顔を見直した。なかなかの美人だった。それも育ちのいい美人に見える。年齢は四十歳前後といったところだろう。年齢的には、あの浮浪者につり合っているが、妻君にはとうてい見えない。

「違うと思いますがねえ」

「とにかく、遺体を見せて下さい」

と、女は、いい張った。

警官は、彼女を遺体と面会させた。すでに棺に納められている遺体を、屈み込んで、じつと見つめていた女は、

「主人によく似ています。顔も、眼の下のホクロも」

と、立ち合った警官を、振り返った。

「よく似ているだけですか？」

「主人は、こんなに不精ひげが生えていませんでした。すいませんけど、剃^{かみ}って頂けませんか？」
と、女がいい、警官は、仕方なく、剃^{かみ}刀と石鹼を持って来た。死体の顔剃りは、ぞっとしない作業だったが、どうにかすませて、タオルで石鹼を拭き取った。

不精ヒゲがなくなると、遺体は、二、三歳若くなったように見えた。

「これでどうですか？」

警官がきくと、女は、急に、「うッ」と、小さな呻き声をあげ、

「主人です。主人に間違いありません」

と、甲高くいった。

3

その日の夜、警視庁捜査一課の十津川警部は、内密に、本多一課長に呼ばれた。

小柄な本多一課長は、風邪をひいたらしく苦しげに咳をしてから、

「君に、調べて貰いたいことがある。内密にだ。これは、総監からの命令でね」

と、十津川にいった。

「どんなことでしようか？」

十津川は、落着いた声できいた。また、本多が、大きな咳をした。

「私は、どうも風邪に弱くてねえ。ところで、君に調べて貰いたいことだが、二日前に、上野公園の中で、中年の浮浪者が凍死した」

「それなら新聞で読みました。まだ身元がわからないそうですね」

「それが、数時間前にわかったのだ」

「しかし、それなら、何を私が――？」

「身元がわかったんで、問題が起きてしまったんだよ。凍死した浮浪者が、いったい誰だったと思う？ 関根代議士だ」

「本当ですか？」

思わず、十津川は、きき返してしまった。

関根は、保守党の若手のホープと騒がれ、血統の良さも手伝って、二年前、四十三歳の若さで、国務大臣に就任した。だが、翌年、疑獄事件が起き、それに関係していたとして、大臣を辞めた。しかし、今でも、保守党の若手のホープであることに変わりはない。

「本当なのだ。妻君や、兄が確認している」

「どうもわかりませんね」

「妻君も、わけがわからないといって、泣いているそうだ。とにかく、大臣にまでなった人だからね。浮浪者みたいな恰好で凍死していたというのはまずいということで、マスコミの方は押さえることにして、遺体は、ひそかに関根家へ移された。多分、明日ぐらいに、病死という発表でもあるだろう。ただ、関根代議士の叔父に当る人から、うちに要請があつた。関根代議士が、何故、浮浪者の恰好で凍死していたのか、その理由を調べて欲しいというのだよ。それも内密にだ」

「関根代議士の叔父に当る方は、確か、以前、公安委員をやられていましたね」

「その通りだよ」と、本多は、苦笑した。

「うちの総監と親しい人だ。君に調べて貰うのは、それだけでなく、死んだのが関根代議士となると、死因にも不審が感じられるからだよ」

「わかりました」

と、十津川はいった。

本多課長がいった通り、翌日の朝刊に、関根代議士の死が病死として発表されていた。死亡は昨夜の午後十一時で、死因は心不全になっていた。

十津川は、午後になってから、降り出した雨の中を、中野にある関根邸を訪ねた。

花輪の飾られた関根邸では、葬儀の最中だった。

さすがに、元大臣ということもあって、参列者も多く、広い庭には、雨をよけるための大きな

テントが張られ、参列者のために椅子が並べられていた。

拡声機で、読経が流れている。十津川も、焼香をすませてから、喪服姿の未亡人、章子に、二階で話を聞いた。

「今月の十五日でした」と、章子は、数珠をまさぐりながら、十津川にいった。

「いろいろと考えることがあるので、一週間ばかり、ひとりで旅行して来るといつて出かけたんです。例の事件の後だったものですから、別に怪しまずに送り出したんですけれど――」

「はつきりした行先を告げずに出かけられたんですか？」

「ええ。気ままな旅をしたいということでしたから」

「旅費は、どのくらい持って行かれたんですか？」

「私が知っているのは、五十万円だけですが、他に百万ほど持って行ったようです。それに、クレジットカードを持っておりましたから、それでも、必要な物は買えた筈と思います」

「すると、百五十万円にクレジットカードが失くなっていたわけですね？」

「何もかもですわ。三百万したパテックの腕時計も、プラチナの指輪も、英国製の背広も」

「靴は、関根さんが履いていかれたものだったようですね？」

「ええ」

「それは間違いありませんか？」

「私が主人とヨーロッパ旅行をしたとき、イタリアのテストーニという専門店でオーダーして二足作って貰った中の一足なんです。間違いありませんわ」